

## 日々の田高（分身ロボット OriHime のパイロットさんとの交流会）



～孤独とバリアを考える～

令和 7 年 12 月 19 日の午後、分身ロボット OriHime のパイロットさんとの交流会を行いました。

これは、東京都教育庁地域教育支援部が実施する「インクルーシブ教育」の取り組みの枠組みで行うことができました。

参加したのは、希望した生徒 17 名。それぞれ、案内を見たり、先生や保護者さんから勧められたりする中で、自ら決めて、参加した生徒たちです。

2 時間のプログラムで、前半は、分身ロボット OriHime が開発された経緯を知り、分身ロボット OriHime を操作することで社会とつながるパイロットさんの思いを知ること。後半は、5～6 人のグループにパイロットさんに入ってもらい、社会のバリアについて、考え、共有する時間としました。

	
吉藤オリィさんのメッセージを聞く	まぢゅんさんの全体講演 分身ロボット OriHime を介しての講演です。

まず、分身ロボット OriHime 開発者の吉藤オリィさんのメッセージ動画を視聴します。吉藤さんは、自身の経験から、孤独を解消することを自身のテーマとしつつ、中高生の時に関わったロボットの開発から、孤独の三要素である「役割」「移動」「対話」の解消を担うものとして、分身ロボット OriHime の開発に取り組んだそうです。

次に、全体の基調講演がありました。講師として、パイロットのまぢゅんさんから、次のような話がありました。

大学院で研究を進めるなかで、神経難病を患い、車椅子の生活となりました。就職して、働いていたところコロナに罹患し、寝たきりの生活となりました。会社からは、様々な提案があったものの、職責を果たせない。申し訳ないと退職。退職したものの、「役割、移動、対話がなくなり、強い孤独感を感じた」そうです。その頃の最初の選択肢は、「諦める」でした。現在は、分身ロボット OriHime を介して、社会と繋がり、勤務するとともに、社会のバリアやご自身の思いを講演により伝えています。

まぢゅんさんの「OriHime は、私を社会に運ぶ車椅子」という言葉が印象的でした。

後半は、生徒たちは、3 班に分かれました。各班に、パイロットさんが入ってくださり、「社会のバリ

ア」について意見交換をしました。具体例を挙げようと促されますが、なかなか思い浮かびません。そんな中、パイロットさんからの経験から、ヘルパーさんの制度、映画館やコンサートなどの制限、道路のバリアなどを聞きます。話し合いが進むにつれて、人の思い込みもバリアに繋がるかもしれないという発言も出てきます。

		
まちゅんさんの講演の後に、ロボットを介して話をする生徒	休み時間に、OriHime ロボットの操作を体験する生徒	グループに分かれて、バリアについて話し合いを進めます。

パイロットさんからは、「バリアは見えないところに多い。それにどのように気づくのか。」と投げかけられます。そして、「当事者の声を聞く事。」「知らないことを、知ることが、社会を変える一歩。」「諦めなくていい社会を作ろう」と投げかけられました。

#### 「振り返りシートの『学んだこと』から

「知らない」が「知っている」になると、見え方は大きく変わる。だから一歩踏み出してみることが大切。
自分が当たり前だと思っていることを見つめなおして、新たな視点をもつことは、今回だけでなく、様々なことを知れるきっかけになる。
身体障がいのある人や移動が難しい人にとって「働く」ということは、孤立せず様々な人とつながりを持ち、社会に参加している実感を得るものだとなった。
バリアについて、階段や道の細さなどのことがすぐに思い浮かんだが、知らないことや思い浮かばないことが多く、「知らない」でいる私たちもバリアの一つなのかなと気づいた。
心のバリアが思っている以上に大きく、それを守ることが交流につながることを学んだ。

#### 「振り返りシートの『パイロットさんへのメッセージ』から

私が日常生活で意識したことがなかった様々なバリアを知ることができました。遠くにいる方々と関われる機会があるのは嬉しいし、画期的だなと感じました。本日は、ありがとうございました！日本橋のカフェに絶対行きます！
身体障がいのある方は、将来動けなくなる私たちの先輩で、学ぶことがたくさんあるという言葉にハッとしました。

私にとっても、生徒にとっても、新たな視点をいただけた、貴重な時間となりました。関係の皆様、ありがとうございました。